

## 平成26年度 各種調査結果等を活用した学力向上の取組事例

事務所名	県北	学校名	二戸市立金田一中学校	TEL	0195-27-3101
------	----	-----	------------	-----	--------------

### 確かな学力の定着に向けた取組の継続と改善

**【ねらい】** <各種調査結果を学力保障の取組の検証に活用し、生徒一人一人に確かな学力を身に付ける>

本校では、学力保障の取組におけるPDCAサイクルに各種調査結果を下記のように位置づけている。

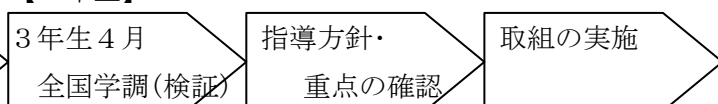
**【1年生】**



**【2年生】**



**【3年生】**



※指導方針の立案は学力向上推進委員会（校長、副校長、教務主任、研究主任、研究副主任、他の学年より1名）

本校では平成24年に、「確かな学力を身に付ける生徒の育成」を主題に、①家庭学習のサイクル化、②二戸授業モデルに基づいた授業実践、③授業スキル「金中ファイブ」の取組、を3つの柱として学校公開を行った。この年度までは、各種調査において一定の学力の向上を遂げることができており、大きな方針変換はなかった。

### 【具体的な取組】

#### 1. NRTから県学調まで

平成25年4月に新入生に行ったNRT調査結果は以下のとおりであった。（資料1）

教科	平成25年度入学生	平成24年度入学生	平成23年度入学生	（平成23年度入学生比）
国語	-1.6	-0.3	0	
数学	-1.2	2.3	0	
社会	-3.7	-2.7	0	
理科	-1.0	-0.5	0	
教科総合	-2.1	-0.3	0	

平成25年度入学生は、調査した全ての教科でこれまでの入学生に比べ大きく下回っていることが分かった。しかし、学校公開で培った指導を例年通り続けられれば向上するであろうと判断し、以下の取組を前年度に引き続き行うことを確認した。

#### (1) 家庭学習のサイクル化

以下の2つに取り組みさせる。

- ①各教科から出題される宿題と月曜理科、火曜国語、水曜数学、木曜社会、金曜英語、土日自主学習（2～4P）の2階建て構造。
- ②各教科の家庭学習の内容は授業に生かす（サイクル化）ように工夫して教科担当が指示し、教科担当が提出状況と内容をチェックする。

#### (2) 二戸授業モデルに基づいた授業実践

以下の3つを意識した授業展開を行う。

- ①ゴールが明確な課題設定
- ②言語活動を位置づけた課題解決

③定着時間の確保

### (3) 生徒会の取組

①全校が同じ問題で正答率を競い合う「一斉テスト」。80点以上取れなかった者は合格するまで何度も受け直す。

②「めざせパーフェクト運動（めざパー）」における「提出物めざパー」や「金中ファイブ（(1)授業準備、(2)あいさつ、(3)返事、(4)声の大きさ、(5)見て聴く）めざパー」を学級対抗で競い合う。

### (4) 県学調「授業改善方策シート」の作成

県学調の「調査結果活用レポート」に加え、「授業改善方策シート」を各教科で作成する。

## 2. 県学調による検証（1学年時）

平成25年度の岩手県学習定着度状況調査結果（1年生）は以下のとおりであった。（資料2）

教科	県平均との差	教科	県平均との差	教科	県平均との差
国語	-0.3	数学	-8.9	英語	-6.5

数学と英語の落ち込みが大きく学力が向上していないという結果を受け、これまでの方針を見直し、以下のような取組を行った。

## 3. 県学調結果（1年時）を受けての見直し

### (1) 家庭学習

これまでの取組を以下のように見直すことにした。

①数学と英語のみとする。他教科で宿題を出す場合は、生徒の負担とならないよう配慮する。

#### ②内容

・数学：教科のある日は授業で扱った内容のワーク。

教科のない日と土日は教科担当が作成した生徒の実態に合ったプリント。

・英語：教科のある日は授業で学習した文型の視写。

教科のない日と土日は教科担当が作成した生徒の実態に合ったプリント。

### (2) 授業実践

二戸授業モデルの実践に加え、教師が授業中に頑張る「教師版金中ファイブ（(1)表情・言葉遣い、(2)ゴールからの展開・言語活動、(3)発問・指示の精選、(4)机間指導・個別指導、(5)思考・発問を支える板書）」を設定した。この5つの視点から授業改善を進め、ワークショップ型で授業研究会を行っていくことにした。

### (3) 生徒会の取組

「一斉テスト」で不合格だった生徒に対して教師が補習を行ったうえで、再テストに臨むようにした。

### (4) 県学調「授業改善方策シート」の検討

各教科で作成した「授業改善方策シート」を学力向上推進委員会に提出し、検討する。

## 4. 県学調による検証（2学年時）

平成26年度の岩手県学習定着度状況調査結果（2年生）は以下のとおりであった。（資料3）

教科	県平均との差（25年度）	県平均との差（26年度）	伸び
国語	-0.3	-2.0	-1.7
社会		-2.5	
数学	-8.9	-6.1	+2.7
理科		-4.4	
英語	-6.5	-2.2	+4.3

全ての教科で県平均を下回ってはいるものの、重点的に取り組んできた数学と英語については、県平均との差が縮まってきている。

## 5. 県学調結果（2年時）を受けての見直し

県学調結果を受け、取組の方針を以下のようにした。

- ・家庭学習、授業実践、生徒会の取組は基本的にこれまでのものを継続する。
- ・個のつまづきに対応するため、「個別指導時間の確保」と「少人数指導の拡大」を行う。

### 【個別指導時間の確保】

「式と計算」領域に課題を抱える生徒に対して、県学調の結果からつまづいている項目を明記した個人指導カードを作成し、昼休みに理解不足の部分の補習を行う。担当は、教科担当、校長、副校長、教務主任。

### 【少人数指導の拡大】

これまで1学年でのみ行っていた数学、英語の時間の少人数指導を2年生でも実施する。

## 6. 各調査結果分析の改善

### （1）25年度まで

#### ①方法

校長、副校長、教務主任、研究主任、各学年がそれぞれ調査結果を分析し、それを持ち寄って学力向上推進委員会で検討。

#### ②課題

全員の分析が揃うよう学力向上推進委員会を遅く開催していた。そのためP D C AのCが遅くなり、次のAも遅くなっていた。結果として対策のために十分な時間を確保できなかった。

### （2）26年度より

#### ①方法

各調査の分析をできるだけ素早く行い、結果を全職員に提示し検討するよう学力向上推進委員会の開催を調査終了後早い時期に行うように改善した（分析が早く終わった者が先に提示し、分析途中の者は検討時に自分の分析を基に意見を述べる）。

## 【成果】

- 現2年生の県学調の結果を比較すると、資料3に示したとおり数学、英語ともに県平均との差が小さくなっている。これまでの取組を通して、少しずつではあるが力は付いてきていると考えられる。今後も現在の方針に従って取組を継続していく必要がある。
- 「一斉テスト」では、80点未満の生徒に対する教師の補習を実施したことで、再テストに向けての取組姿勢が改善している。同時に「やればできる」という自信を生徒が持つきっかけともなっている。26年度は徐々にパーフェクトを達成でき、これも生徒の自信につながってきている。
- 「教師版金中ファイブ」の取組により、表情や発問、展開や合理的な板書を教師が意識することで、「わかりやすい授業」が実践できてきていると思う。授業研のような特別な場合だけでなく、普段から意識して授業に臨むよう先生方への呼びかけを続けたい。
- 調査結果の分析に要していた時間の短縮化を進めたことにより、迅速な対応と一定期間の継続した取組が可能となった。
- 県学調の「授業改善方策シート」を各教科で作成・提出することによって、次年度につながる指導を意識することができた。また、委員会で検討して教科に意見することによって授業改善につながったと思う。